

# リハビリ専門家からのメッセージ

～脳卒中発症予防とともに、患者が安心して社会復帰できるために～(下)

医療法人上善会かりゆし病院 回復期リハビリテーション病棟

リハビリテーション科 古橋哲専門医・理学療法士 西原美樹課長・理学療法士 石垣司主任

質問3. 専門家の立場で、八重山の脳卒中リハビリテーション体制について感じていることは、

若い脳卒中患者の地域での受け皿づくりが必要である。

若い方が脳卒中になつた場合、職場復帰まで目指している。

入院中に職場の方とも話し合い元の仕事に戻るか、別の業務に交えて復職できるのかを話し合っている。

経済的な問題のためもあるが、地域との関わりを続けるためにも、目標(家庭復帰・社会復帰)まで患者を中心に関係者でつなげていけるよう働きかけている。

若い脳卒中患者は、職場復帰が難しくても、地域の中に出ている場所があれば社会復帰の可能性がある。

入院中は理学療法士以外に、作業療法士や言語聴覚士のリハビリ専門職が、職場復帰や家庭復帰に向けてリハビリをするが、退院後の長期的なフォローがなかなかできない状況である。

島内では、社会復帰のための訓練施設が少なく、他県に紹介した例がある。

また、元の職場への復帰ができない場合、就労支援につなげる援助をしているが十分ではない。

介護保険サービス等の利用に関しては、若い方は高齢者

に混ざって通所介護や通所リハビリを利用したがない場合が多い。

質問4. 専門家の立場から、患者が退院後に家で過ごすための課題は何か、

退院後、職場復帰・家庭復帰をした方は、自動車運転が必要となるが課題が多い。

島内は、移動手段に車がないと困る。沖縄県は運転免許返納で恩典があるが、石垣市は制度等が充分でなく移動手段の制限があり、社会復帰を難しくしている現状がある。車の運転ができない方への支援が必要。

40代で脳卒中発症後、社会復帰できない(と)は厳しい。

特に、\*高次脳機能障害がある場合は、外見からは判断しにくく、運動麻痺が軽くて自動車の運転動作が可能でも、運転中に危険を察知し、その場にあつた対応ができない場合がある。

逆に麻痺が残っても、高次脳機能障害がない場合もあり、医療機関で評価し、実車テストを受けた上で免許を取得する仕組みづくり(医療機関・安全運転学校・公安委員会の円滑な連携)が急がれる。

\*高次脳機能障害 「記憶する」「集中する」「考える」「感情をコントロールする」「コミュニケーションをとる」等、私たちが日常生活や社会

生活を送ることに支障をきたした状態のこと。

質問5. 専門家の立場から、リハビリの方々に伝えたいことは、

患者の中には、急性期から回復期に来る際に「あとほあなたの前張りの次第」と言われてくる人がいる。

家庭や地域で自分ができることから役割を見つけ、できないことは誰かに頼むことは特別なことでは無いと思つてほしい。後遺症が残つたとしても胸をはって生活していただければと思う。

患者の周囲の方々にも伝えたいこととして、患者の生活習慣に理解を示し、無理な飲食をさせない。

高次脳機能障害に対しては、私たちの助言を参考に長期的に見守つていただきたい。私たちは、患者が社会で自立して行けるよう入院中から支援して行く。

病状が思うように回復せず、イライラする場合は、遠慮なく私たちに愚痴を言つてほしいし、リハビリに対する意見もほしい。精神的な部分も含めて一緒にリハビリ支援していきたい。

(終わり)

記事を読んで頂いた方々、インタビューを受けて頂いた方々、掲載頂いた新聞社に感謝申し上げます。

八重山保健所 健康推進班 (TEL 4000-1)